

《2017年10月20-21日 於円光大学校(韓国)》

## 日韓共同国際学術大会

### 特集：日韓伝統思想の近代化過程と批判的省察

## 大会趣旨

片岡龍（東北大学）

本特集は、本研究会会員の片岡龍・東北大准教授が共同研究代表を務める日本学術振興会の二国間交流事業・共同研究（韓国）「伝統思想の近代化と非欧米的近代の模索」（平成29年4月1日～平成31年3月31日）の共同研究活動の一環として、2017年10月20日（金）－21日（土）、韓国の円光大学校崇山記念館において開催された日韓共同国際学術大会「日韓伝統思想の近代化過程と批判的省察」の成果を報告するものである。

なお、韓国語による成果報告は、上記事業の韓国側代表者である朴光洙・円光大学校教授が所長を務める同大学校宗教問題研究所の機関誌『韓国宗教』43輯（2018年2月15日刊行予定）に収録される。本誌に収録する論文の一部は、『韓国宗教』43輯に掲載された論文（韓国語）を、同誌発行者の承諾のもと、広く日本語読者層に提供する目的で、日本語原文あるいは日本語翻訳を掲げたものであり、その旨を該当論文の脚注冒頭に記した。

ところで、上記事業の目的は、欧米的近代の末路に面した近代世界の現実を直視し、世界の諸地域、特に東学・天道教をはじめとする近代韓国の土着的民衆宗教の「開闢」思想と運動の実態に学びつつ、イスラームやアフリカなどの文明史・人類史的観点を参照軸として、生命と平和を中心とした新たな人間・社会への展望を切り開く〈主体的・対話的・更新的な近代性 modernity〉の理論化の共創をめざす、というものである。

そこで、上記国際学術大会においては、19世紀末～20世紀初頭にインド、アフリカ、アジアなどの非西欧地域で同時多発的に起きた「土着的近代化運動」（indigenous modernization movement）の具体的な事例と、それが持つ思想史的意味の考察に主眼が置かれた。本誌では、このような全体の趣旨から国際学術大会の様子を報告した趙晟桓「土着的近代化と開闢思想」（『開闢新聞』第68号、2017.10）の日本語翻訳も収録した。

以下、国際学術大会の基調講演と個別報告すべての概要（修正稿内容を含む）を掲げる。本誌に収録したものは冒頭に\*を付した。

**\*金敬宰「韓国近代化を貫通する変革運動の主樂想の省察- 共同体の生、宇宙・神——人的靈性、社会的政治的改革を中心に」**

茶山丁若鏞・恵岡崔漢綺・水雲崔濟愚・海月崔時亨（儒学系統）、少太山朴重彬・万海韓龍雲（仏学系統）、信天咸錫憲・長空金在俊（キリスト教系統）の8人の事例をとりあげながら、韓国人の土着的近代化論の主樂想として、〈共同体的な人間観（⇔「窓のない単子」

的個人))、〈「宇宙-神-人」論的靈性 (⇔道具的技術理性))、〈民主的「生命・正義・平和」実現をめざすサルリム (生かし、暮らし) の政治 (⇔国家主義))、〈生態倫理的なネオヒューマニズム (⇔人間中心主義)) の4項目を挙げる。

**\*板垣雄三「〈伝統と近代〉を問い直す satyagraha(真理把握)——病める欧米的 modernity の末路に際して」**

〈伝統と近代性〉問題をめぐりほぼ70年に及ぶ批判的考究の軌跡をたどりながら、〈南アフリカでサティヤーグラハを担ったムスリムの役割の評価〉、〈「イスラームの近代性」論における問題群／ヨーロッパないし欧米の近代性病変の症状群／華嚴思想とタウヒードとの通底性の諸相／イスラームと性理学(宋学)との間の共振共鳴の諸相／の整理・列举〉、〈帝国主義・植民地主義に対する抵抗を支える伝統的思想資源で自立的近代性を獲得・実現しようとする闘いが、おのずと超近代の再生につながる構図の提出〉、〈「規範的未来史」という枠組の提案〉の4項目に関してオリジナルな知見を示す。

**尹丞容「宗教の文明化と近代化——東アジアの民衆宗教を中心に」**

近代の文明宗教化に際し、日本は〈神道非宗教論〉、中国は〈宗教迷信論〉という支配的言説を核に再編され、一方、韓国は〈類似宗教(類似政治結社団体)論〉によって文明宗教ではなく、社会変革を追求する開闢宗教として定着する(→日本:首相の神社参拝問題、中国:宗教弾圧問題、韓国:宗教の政治参加問題)。

**\*北島義信「日・韓の近代化と民衆思想——アフリカの観点を中心に」**

南アフリカのウブントゥ(相互関係性、相生と非暴力、他者尊重、外部性としての他者を基軸とした自己相対化、平等と差異の併存を意味し、それが思想にとどまることなくそれを具体的に保証する共同体と一体化したもの)は土着的次元でキリスト教と結合して深化し、もう一つの「近代化」を提示した。韓国の土着的ハヌルニムの宗教思想も同様の展開を見せたが、日本の民衆宗教は不十分。

**\*佐々木隼相／片岡龍「日本と韓国における「実学」の近代化——福澤諭吉と李能和を中心に」**

あらゆる存在を物理的に捉え、宗教も道具化しながら〈科学帝国主義〉へと帰結した日本の「実学」と、あらゆる存在の多様性と相関性を認め、宗教も土着的宗教の上に「百教会通」的に発展することを理想とした韓国の「実学」の事例を比較した。「土着的近代化」の理論化については仮題を残す。

**元永常「韓国における仏教の近代化——「仏教改革論」を中心に」**

韓国の近代仏教改革論(①学問の発展、②結社運動化、③在家仏教的性向)の方向は、仏教の時代的役割による大乘仏教の救済宗教としての使命を新たに呼び起こすことであり、最も現代仏教としての改革をめざした円仏教も仏教の伝統精神を離れるものではない(「維新」)。そこ(特に①③)に日本の影響を無視することはできない。

**趙晟桓「韓国における伝統思想の近代化——東学を中心に」**

「開化派」(近代・西洋) vs. 「斥邪派」(伝統・中国) という二分法的な19世紀後半韓国

思想史の従来の枠組みを、「開闢派」（民衆が靈性修煉と社会的実践を通して、新しい世の中＝近代を積極的に開くことめざす、東学から円仏教にいたる民衆宗教）を中心にして見直すことを提案し、東学が土着的なハヌル（天）概念を基にして、朱子学的世界観を克服しながら西欧的近代とは異なる韓国的近代を模索したかを考察。

**\*朴奎泰「近代日本の神道と土着的近代化——明治神宮と「和魂洋才」を中心に」**

日本の土着的近代化の標本として、「和魂洋才」の構造としての明治神宮のイデオロギー的虚構をハイブリッド的陰画として捉えながら、その空間構造の間隙にハイブリッド的陽画の可能性を暗示。

**\*陳宗炫「韓国の日系新宗教受容における近代化——聖地と救済」**

日本の近代化に影響を受けながら整備された天理教の組織・制度的な伝統として、「ぢば」（聖地）を中心にして行われる重要な儀礼があり、戦前の韓国でも世界各地の天理教と同様にその伝統を重視したが、戦後の交流断絶期に「ぢば」に行くことなしに救済が行われた事実を重視して、天理教韓国教団から分裂した大韓天理教の事例を紹介し、そこに「土着的近代化」の可能性を見る。

**朴光洙「円仏教の土着的近代化運動——経済と精神の自立を中心に」**

円仏教の「土着的近代化」（土着的な伝統を批判しながらも主体的に近代化を遂げようとする）を、伝統宗教と西欧近代の負の側面（身分差別、弱肉強食）の転換、正の側面の継承を中心に検討し、強者と弱者の従属的関係を乗り越えるために〈「経済（物質）」の西欧的近代化と「精神」の東洋的道德分明の調和〉の可能性を模索したことに注目。

**\*邊英浩「天道教の近代化運動——孫秉熙を中心に」**

韓国の土着的近代化の代表としての東学・天道教第三代孫秉熙の唱えた「人乃天」は、崔濟愚の「侍天主」における人格神的要素を減退（自然法則的な天観へと止揚）させた、たんなる人間主義的な近代思想と誤解されているが、法則的自然観は人格神と両立することを朱子・退溪の思想を通して確認し、また「人乃天」は神秘主義的な体験と修行による人格的高まり（神との対話可能性の高まり）を前提する（「以身換性」という点で「侍天主」を継承することを論じる。

最後に、今年度の国際学術大会の成果をふりかえると、「土着的近代化運動」の概念について一定程度の理解の共有を得ながらも、特にそれが「西洋的近代化」と二項対立的に捉えられがちだという点で、再検討の余地を残している。今後は、「西洋的近代化」をもその多様な現れの一部（病変）として織りなすような一つの「近代性」概念の共有の必要性が望まれる。

なお、上記国際学術大会の開催と本誌の刊行に、日本学術振興会二国間交流事業・共同研究（韓国）の支援を受けた。また同事業韓国側代表の朴光洙先生、国際学術大会を主催した円光大学校宗教問題研究所をはじめとする関係者のみなさまに、あらためて感謝の意を表したい。